



Consumption of dairy products and death from cardiovascular disease in the Japanese general population: The NIPPON DATA80

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2018-09-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 今子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003417

論文審査の結果の要旨

日本において、牛乳・乳製品の摂取は特にカルシウム摂取の点で推奨されているが、西洋諸国からは乳製品の摂取と循環器疾患との負の関連について多く報告されている。本研究の分析には NIPPON DATA80 (National Integrated Project for Prospective Observation of Non-communicable Disease And its Trends in the Aged) のデータセットを用いた。これは 1980 年に 10,546 人を対象に実施した循環器疾患基礎調査と国民栄養調査をベースラインデータ、人口動態統計によって追跡した 2004 年までの 24 年間の死亡をアウトカムデータとしたものである。牛乳・乳製品摂取量3分位(以下3群)間のトレンドおよび牛乳・乳製品摂取 100 g/日あたりのハザード比を三つのモデルで算出した。

分析対象は男性 4,045 人、女性 5,198 人で、24 年間の追跡期間中に男性 1,372 人、女性 1,208 人が死亡した。ハザード比は、女性では、循環器疾患死亡はモデル2において低摂取群で 1.27 (95 %信頼区間 0.99-1.58) と高く、3群間に有意な負のトレンドがみられた。さらに牛乳・乳製品摂取 100 g/日増加のハザード比は 0.86 (0.74-0.99) と有意に低かった。心疾患死亡は、全てのモデルにおいて3群間に有意な負のトレンドがみられた。脳血管疾患死亡では有意な関連は見られなかった。また、男性ではいずれにおいても有意な関連はみられなかった。本研究では、血清総コレステロールが牛乳・乳製品高摂取群で高値であったにもかかわらず、牛乳・乳製品の摂取は循環器疾患死亡と負の関連が見られた。この関連は血清総コレステロールを調整した場合にも大きな変化はなかった。以上より、牛乳・乳製品の摂取は日本人女性において循環器疾患死亡と負の関連を示し、1日あたり 100g摂取が増すごとに循環器死亡のリスクは 14 %低下した。

審査委員会は、本研究が日本を代表する大規模対象への 24 年の長期追跡であり、食品摂取量把握が食事記録法による点であることを高く評価した。

論文審査担当者 主査 林 秀晴

副査 前川 真人 副査 加藤 明彦